

あろうか。尤も少部分にみられる朱點や間々認められる誤點訂正の筆致は宗祖のそれを彷彿せしめるものがあるが、これについては後述する。第三には加點の送字の中「玉・云・上・下・ノ」等、他の眞蹟には全くみられないか、或は使用例の乏しいものが全面的に用いられていること、第四には本書の加點讀法は僅かではあるが宗祖の深い體驗に基く獨自の加點と矛盾する如き讀法が認められることが指摘せられる。

然るにここに特に注目すべき事實がある。即ち本書の加點は存覺師書寫の觀阿彌陀經集註(重修寺藏)に師が自ら附した加點と全面的に一致するという事實である(もとより上述第四に指摘した如き本書獨自の加點もそのまま踏襲せられている)。この事實こそ本書が既に存覺師の當時において宗祖御加點本として承認尊重せられていた事實を物語るものといつてよく、それゆゑに存覺師は慎重に寫しとつた宗祖眞蹟集註(西本願寺藏)の白文の部分に附する加點を、同じく「宗祖御加點本」たる本書に據られたのであろう。ここにおいて更に上述した本書の朱筆加點、及び誤點訂正の筆致が眞蹟を思わしむる事實を顧るとき、本書については次の如くいえるとおもう。

恐らく本書には聖人以外の原加點者があつて——それは側近の門弟の一人であつたであらう——宗祖の懇篤な示教を戴しつつ、自用のため全卷に細筆の加點を施し、これを以て宗祖の校閲を仰いだ、宗祖はその懇請に應じて全文を閲讀せられ、原加點の誤讀は一々これを訂正し、或る部分には朱筆を加え、そして最後に同じく原加點者の懇請を容れて親しく各卷の題箋をのせられた、かくして成つたものが本書五部九卷の「宗祖御加

點本」であろうと。しかしてこの場合宗祖の識見と矛盾する二三の加點については、本書が大部でありしかも細筆詳細を極めた原加點であつたがために、僅かながらも校閲漏れを招いた結果によるものではなからうか。

大無量壽經と小乘涅槃經

西尾 京雄

(本講は「親覺教のゴータマ佛教での位態」と題して「中外日報」(三十五年十二月九、十、十三日)に掲載しました。)

淨土論考

幡谷 明

淨土論の具名である「無量壽經優婆提舍願生偈」について、古來論註の題號釋等に依り、三經通申・別依大經という見方がなされて來たことは、周知の如くである。ここではその別依大經ということについて、經と論とが如何なる相應關係にあるかを、論の綱格をなす五念門と三種莊嚴の根據を大經の上に探し求めてゆくことによつて、明かにしてゆきたいと思う。

先ず五念門について窺うと、從來の諸說中で大經に關するものとしては、主として上卷の勝行段の文と下卷の阿難見佛の文とが擧げられるが、それらは必ずしも充分に納得のゆくものとは思われない。それよりも古くは本派の誓鑑師に依り、近くは金子先生に依つて指摘せられた嘆佛偈の文を注意すべきであらうと思う。

詣世自在王如來所稽首佛足右繞三匝長跪合掌——禮拜

光顏巍巍威神無極……如來容顏超世無倫——佛の身業

正覺大音響流十方——佛の言葉

戒聞精進三昧智慧……無明欲怒世尊永無——佛の意業

人雄獅子神德無量……光明威相震動大千——(結證)

願我作佛齊聖法王……不如求道堅正不徇——作願

譬如恒沙諸佛世界……如是精進威神難量——光明無量(攝法身)

令我作佛國土第一……國如泥洹而無等雙——國土最勝(攝淨土)

我當哀愍度脫一切……已到我國快樂安穩——衆生化益(攝衆生)

幸佛信明是我眞證……常令此尊知我心行——觀察

假令身止諸苦毒中……我行精進忍終不悔——廻向

五念門は師教に遇い得た者の上に展開せられる自然必然的な行であり、恐らく世親は十地の菩薩行の實踐に依る阿頼耶識の轉依という根本問題を追求してゆくことに依つて菩薩の死とも呼ばれる七地沈空の難に直面し、それを超える道として法藏の願心に觸れたものであり、それに依つて明かにし得た自らの願生心を表白せる時、それは法藏菩薩の如く五念門の態をとびやるを得なかつたのでなからうか。

吾々はこの嘆佛偈において、五念門と三種莊嚴の相應關係を見出すのであるが、その中光明無量國土最勝の徳は上巻に如來淨土の果として、衆生化益の徳は下巻に衆生往生の果として詳説せられ、世親はそれを攝論の十八圓淨等に依つて二十九種莊嚴に要約せられたものと思われる。

論の三種莊嚴の中、その中核をなすものは不虛作住持功德であるが、それは經の本願成就文更には往觀偈の「其佛本願力」

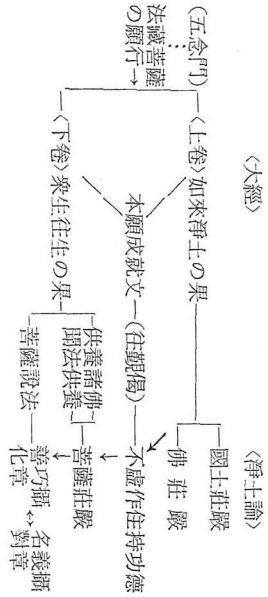
讚嘆

作願

觀察

廻向

密接な相應關係にあると見てよいであらう。



教行信證後序期引用の華嚴經偈について

山田亮賢

『御本書』の後序結文は『華嚴經』の一偈を以て筆が捌かれ

の文に相應するものでありそこから分相的に展開せられた菩薩莊嚴は、經に衆生往生の果として説かれた、補處の菩薩に依る供養諸佛の徳を開示せられたものであり、善巧攝化章以下は經に菩薩の説法の徳として解説せられたものに相應すると考えられる。そして五功德門は、經に「一生補處」と説かれ、論に未證淨心と淨心乃至上地の菩薩について「畢竟得證」と示されたことを、五念門との因果關係において、換言すれば願生と得生との相應關係において明かされたものと考えられるから、經と論とは次の如き